



中秋の名月の頃となりましたが、まだまだ残暑が続いております。皆様、お元気でいらっしゃいますか。研究委員の皆様におかれましては、2学期の校内研究の準備をはじめ、多岐にわたる校務を進めておられるところだと思います。一方、本研究にとっても2学期は非常に重要な時期です。みなさんと共に考え、学んできた校内研究活性化に向けての取組を本格的に実践していただき、その有効性を検証していく学期となるからです。実践校にお伺いする機会が増えるかと思っておりますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。さて、プロ研通信第4号では、第5回研究会での研究委員の皆様への学びについてお伝えします。

第5回研究会 概要

第5回研究会は、8月22日(木)に行いました。この会は、校内研究活性化プロジェクト研究初、県外での研究会でした。夏季校内研修会の視察を快く引き受けてくださったS市立S中学校の皆様、そして参加いただいた研究委員の皆様へ、この場を借りて改めて感謝申し上げます。ありがとうございました。「教員が本気で教育について考える」そんな研究会を目の当たりにして、感銘を受けました。

第5回研究会の流れ

- S市立S中学校にて
- 夏季校内研修会の参観「今年度の研究について」
- 教科会の参観
- S中学校の校内研究主任との懇談



校内研究主任との懇談の様子

夏季校内研修会の参観

校内研究参観シート

S中学校では夏季校内研修会として午前9時より教員全員で2学期に向けての研修に取り組まれていました。午前中は人権の視点や生徒指導について、そして特別支援教育についての研修を実施されていました。多様な視点から研修が行われており、どれも校内研究主題と絡めた内容になっていました。

今回は、授業に関わって学ばれる午後の部を参観させていただきました。参観にあたり、研究委員の皆様には、気付いたことを観点ごとに整理するために「校内研究参観シート」(図1)を使用させていただきました。

ここでは、S中学校の校内研究のモチ方や取り入れられていた工夫を御紹介するとともに、研究委員の皆様への気付きを流れに沿って掲載します。

令和6年度 校内研究活性化プロジェクト研究 第5回研究会
～校内研究先進校から学ぶ in S市立S中学校～

校内研究参観シート

〈参観の視点〉

- 教職員一人一人が自分自身の学びをどのように進めているか。
〔・目標の設定 ・探究的な学びのサイクル 等〕
- 校内研究が教職員一人一人の探究的な学びをどのように支えているか。
〔・校内研究の取組への共通理解 ・協働的な学びの場の設定 ・学びを可視化する工夫 等〕
- 校内研究会の中で、管理職や校内研究主任、研究推進委員、教科主任がどのような役割を担っているか。
〔・協議の場の設定 ・協議の視点 ・協議ツール ・研究成果の検証 等〕

※校内研究会参観後にS中学校の校内研究主任の先生との懇談の場(約20分間)を設けます。
その際に質問したいことも併せて参観メモにお書きください。
※参観メモは本日の研究会終了後、写真撮影にて記録に残し、共有します。

〈参観メモ〉

観点	メモ

図1 参観で使用した「校内研究参観シート」

【S中学校の研究主題】

資質・能力が駆動するカリキュラム・デザインの構築
～ “学びに向かう力” の高まりを感受できる授業改善の実現～

学びに向かう力を高め感受させる学習指導(13:30～15:40)

午後の研修の冒頭で、校内研究主任T教諭が以下のように全体に問いかけられました。

「学んで楽しい」「もっと学びたい」と思える授業とは？

この問いによってS中学校の先生方は、これまでの自身の授業に対する考え方を振り返り、その考えをワークシートに記入しておられました。このように可視化することで、研修前と研修後の自分の考え方の変容に気付くことができるようになっていました。研修の冒頭から学びの振り返りを見据えた仕掛けをすることがとても重要なのだなと感じました。

研究委員の気付き 「会の導入について」



- ・会の最初に「『学んで楽しい』『もっと学びたい』と思える授業とは？」と問いかけ、会を通してその答えを出すという仕掛けがよかった。
- ・問いかけの後すぐに1分間の交流をもつことで一人一人が考えをアウトプットができる。
- ・教員が自分の学びを実感できるようになっている。

① 「問い」「対話」「振り返り」を通じてつなげる各教科の学びと総合的な学習の時間

一つ目の内容は、総合的な学習の時間について考えるもので、総合的な学習の時間の主任を担当されているM教諭が研修を進められました。先生方は、総合的な学習の時間そのものについて学ぶのではなく、各教科の学びと総合的な学習の時間をどのようにつなぐのかを考えられていました。

まずM教諭は、

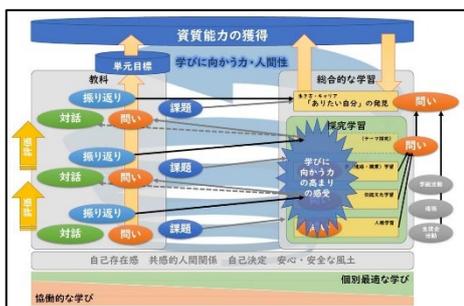
生徒が「学んで楽しい」「もっと学びたい」と思える授業とは？

と、先生方に問いかけられました。T教諭の問いの主語を「生徒が」に限定されたのです。グループごとにこの問いについて協議をされ、その協議の様子を全体で共有されました。あるグループが「わっほー」というキーワードを出して発表されました。頭の中に一瞬「？」が浮かんだのですが、全体からは笑い声が上がりました。緊張感がある研修の空気が一気に和むのが分かりました。その後「わっほー」について説明されました。(写真・図 参照)キャッチーでありながらも納得感のある内容であり、発表が終わると大きな拍手が上がりました。



M教諭

M教諭は和やかな空気の中、すかさず次のスライドを提示され、慶応義塾大学の鹿毛雅治教授の著書より、学びのモチベーションに関する三つの要素(「やりたい!」「やるべき!」「できそう!」)を紹介されました。さらに、これらの要素をS中学校の研究構想図に照らし合わせながら自校の研究を価値付けるお話もされました。



S中学校の研究構想図

を立てておられます。



- ㊦ かる … 理解
- ㊧ かえる … 活用
- ㊨ められる … 自己肯定感
- ㊩ … 一人一人が

協議内容を発表する様子

S中学校では各教科で「問い」「対話」「振り返り」を取り入れて授業改善を行い、子どもたちの学びに向かう力を高めることで、総合的な学習の時間にもその力が活用できるだろうという研究の構想



「教師が」できることとは

- ① 一般化して使える汎用性
- ② 問いを立てて構造化
- ③ 「なぜ」が解決できる
- ④ 身近に感じられる題材

そこで、次の質問は主語を「教師が」にして、各教科での学びと総合的な学習の時間の学びをつなぐためにできることを協議されました。この協議も和やかで明るい雰囲気でありながら一人一人が主体的に発言をされている様子が見えられました。

M教諭からは、「価値付けすること」が教師のできることとして挙げられ、そのことに関連して次の問いが出されました。

今、目の前の生徒は総合的な学習の時間において、どの教科のどのような学びを発揮しているのだろう…？

各教科で子どもたちがどのような学びをしているのかを把握していないことには、身に付けた力と総合的な学習の時間の関連について十分に価値付けすることが難しいというM教諭の御経験が、この問いのもとになっているとのことでした。協議グループごとに一つのファイルを共有して、各教科での育成したい資質・能力が総合的な学習の時間の内容とどのように関連しているのかということをもとめられました。

研究委員の気付き 「ICTの活用について」



- ・プレゼンテーションで**研修内容や研究構想を可視化**しているためとてもわかりやすい。
- ・**校務用PC**を活用して一つのファイルの共同編集を行うことで、作業効率がアップするしデータとしても残るので一石二鳥だ。
- ・各グループに配られている**卓上ホワイトボード**もうまく活用して協議されている。

研究委員の気付き 「研修会の運営について」



- ・校内研究の方向性を定めるために、**主題等を繰り返し確認**している。
- ・進行役の問いは短く端的で、その後の**グループ協議の時間がたっぷりある**。
- ・**教員の主体性を重視**し、発表したい班が発表するよう促している。
- ・校内研究主任だけで会を進行していない。**教員各々の強みや校務分掌を生かしている**。

②各教科の見方・考え方を生かす「メタ認知的知識」の検討

二つ目の内容は、子どもの非認知能力を測定するソフトを活用して出てきたデータを基に協議がもたれました。子どもたちの強みと課題を捉えたり、自分たちの授業や日々の子どもの関わりを見つめ直したりすることを通してⅡ期(2学期)に向けての取組を計画されました。

本日の内容



方向性を
定める



知識と成果を
整理する



教科で
練る

協議の前に、T教諭から二つ目の内容の流れについて説明がありました。

「方向性を定める」「知識と成果を整理する」「教科で練る」の三段階を示され、先生方が見通しをもって研修に臨めるようにされていました。子どもの学びと教師の学びが相似形と言われるように、**授業と校内研究会も相似形**なのだなと実感した瞬間でした。

「方向性を定める」

ここでは、S中学校の研究構想について、先生方が現在、研究のどの段階にいるのかについて再度確認が行われました。また、T教諭が1学期に撮り溜めた写真や動画を全員で視聴しながら、全員で目指す授業のあり方や子どもたちの学びの姿について共通理解が促されました。具体的な子どもの学びの姿が示されるため、見ている先生方は自分の授業でどのように子どもの姿を目指せばよいのかイメージがしやすかったらうと感じました。

次に、子どもたちの「学びに向かう力」の指標として客観的な事実をもって測るための二つの方法について説明がありました。

- メタ認知能力項目 年度初めと年度終わりの2回実施
- 非認知能力測定ソフト 毎月1回実施

今回は、先生方が非認知能力測定ソフトを用いて、自分の教育活動全体を振り返る活動が行われました。本来は子どもたちの非認知能力を測定するためのソフトであるため、先生方は「生徒が〇〇できるようにするための指導・働きかけ・関わりができてきているか」という視点で50の項目を振り返っておられました。



非認知能力に関する八つのグループ



グループごとの協議の様子

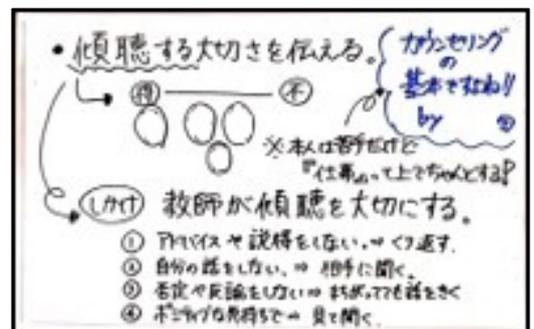
答え終わると、八つの項目が数値化されました。先生方は自分の教育活動において低い値が出た項目でグループに分けられました。そして同じグループになった先生方と、結果がよくなかった項目を伸ばすために、

- ・どのような指導が必要か
- ・どのような働きかけが有効か
- ・どのような関わりが大切か
- ・どのような意識を(教師側が)もつべきなのか

ということについて協議されました。

研究委員の気付き 「研究に対する姿勢」「共通理解」「学びのサイクル」

- ・校内研究を教員みんなで支えていく風土づくりがなされている。
→組織づくりはもちろん、認め合う雰囲気づくりや学ぶ場の設定も大切にしたい。
- ・グループでの話合いの時間にゆとりをもたせることは共通理解を促すうえで大切だ。
- ・校内研究も授業の組み立てと同じで「めあて」「考える」「共有する」「振り返る」で構成されている。



「対人関係スキル」グループの協議まとめ

「知識と成果を整理する」「教科で練る」

ここでは、担当教科ごとにグループを組み直し、I期(1学期)の教科研究を振り返って成果と課題の整理が行われました。そして、「方向性を定める」のパートで協議された視点や、非認知能力測定ソフトを用いて見えてきたS中学校の子どもたちの課題について、教科ごとに授業に取り入れていきたいことやそれを検証するための実証授業の日程の確認等が行われました。

※校内研究活性化プロジェクト研究会としては、「知識と成果を整理する」「教科で練る」の時間にS中学校の校内研究主任のT教諭との懇談をもたせていただいたため十分な参観はできませんでした。

S中学校の校内研究主任との懇談

S中学校の校内研究主任であるT教諭と本プロジェクト研究の関係者による懇談の場を設けていただきました。研究委員からは、

- ・校内研究に対する教員の姿勢
- ・校内研究(研修)会を企画、運営する際の工夫
- ・授業公開や授業参観を設定する際の工夫
- ・校内研究主任として心掛けていること

等

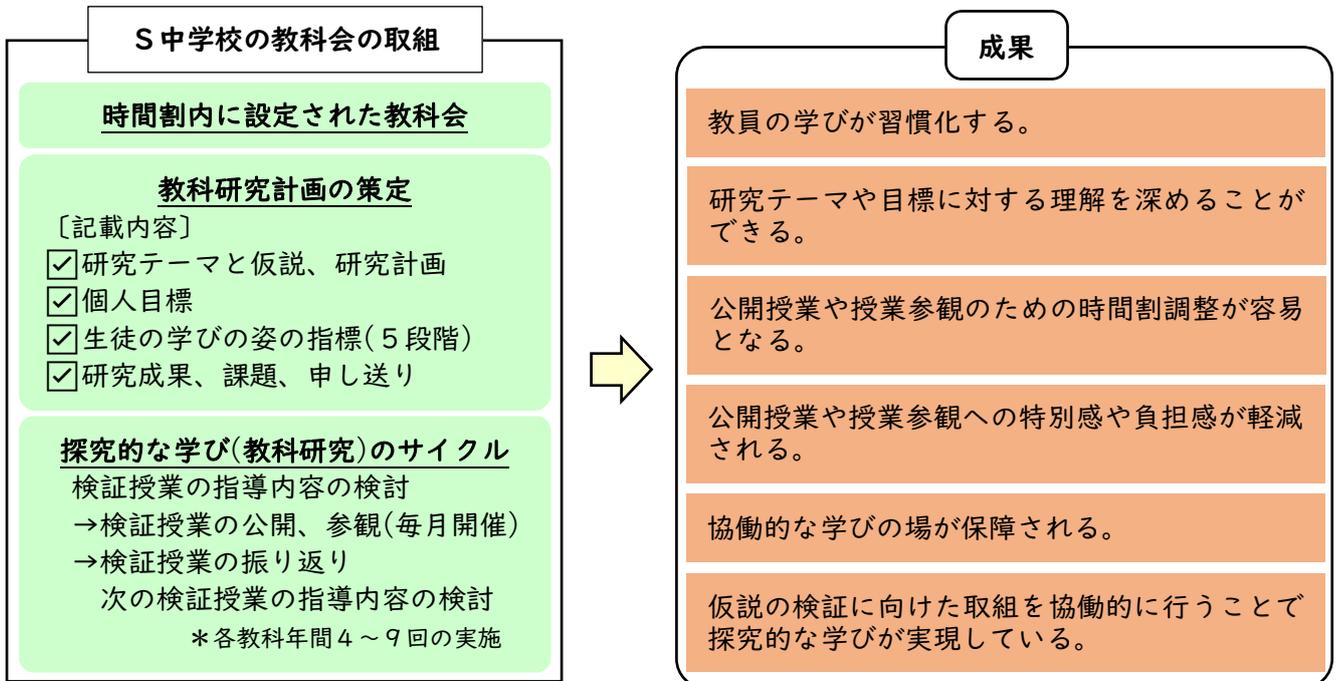


T教諭

について、2学期からの取組のヒントを得られるよう、自校の実情を紹介しながらT教諭に対して多くの質問が行われました。以下は、T教諭の回答を基に、S中学校における校内研究や校内研究主任が取り組まれていることをまとめたものです。

注目! 教科会を中心とした研究推進

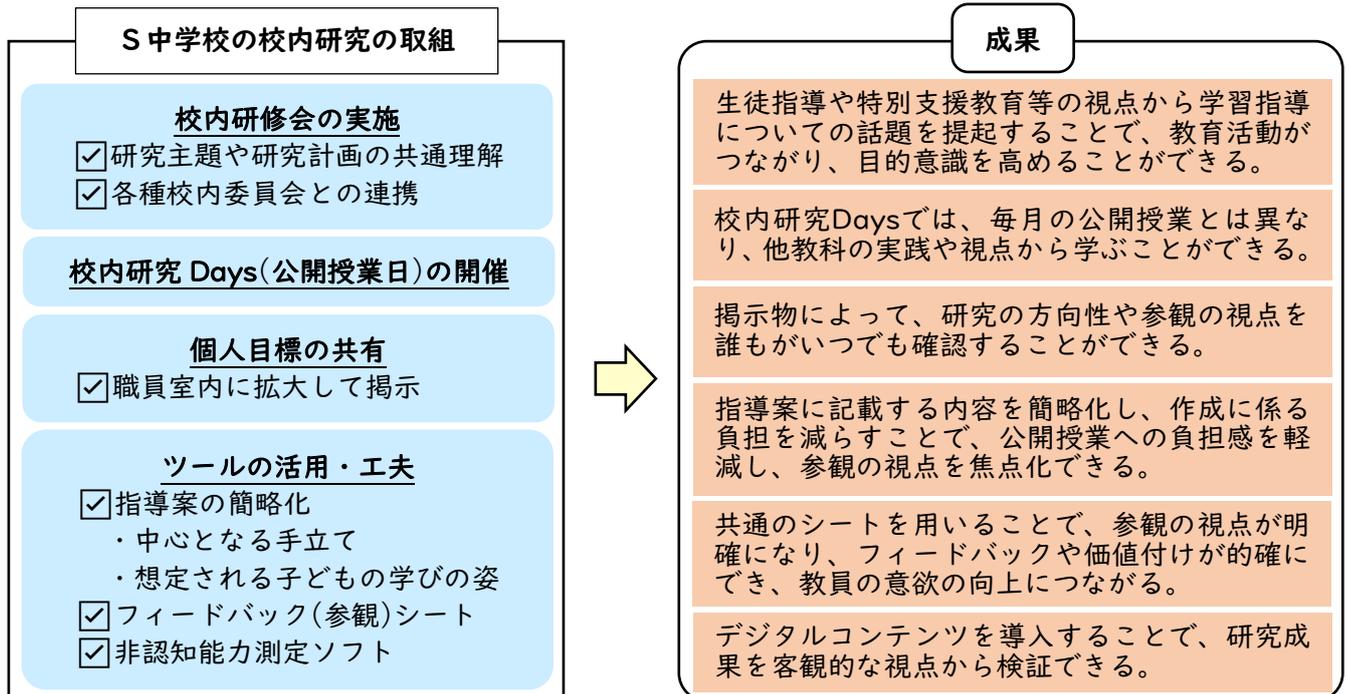
S中学校では、研究主題の達成に向けて、教科毎に目標や仮説を立てて研究を推進されているため、教科会の役割が重要となってきます。S中学校の教科会の取組について、その成果を整理しました。



S中学校における研究推進の大きな特徴は、定期的に行われる教科会によって、個人にすべてを委ねられるのではなく、協働的に教科研究を進めることによる、学びの習慣化と探究的な学びの実現にあります。教科会が時間割内に設定されていることで、先生方の学びがシステムとして効果的に促進されていることが分かります。

注目! 教科会を支える校内研究の取組

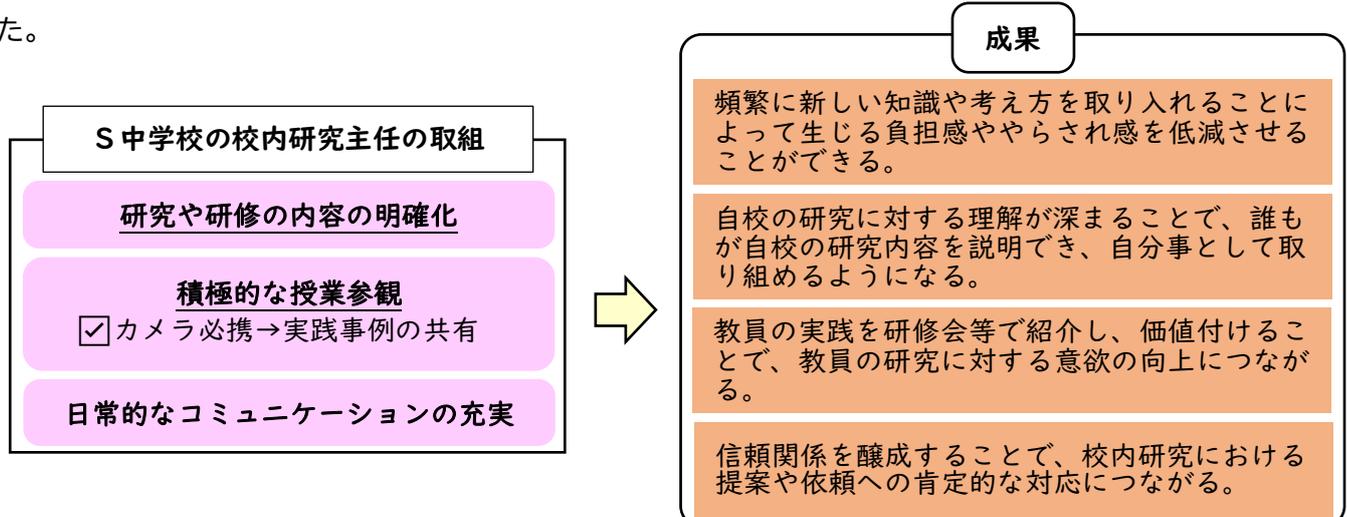
数ある教科の取組を整理し、研究を促進することは容易ではありません。研究推進の柱となる教科会を、S中学校の校内研究がどのように支えているのか、その取組の工夫について整理しました。



今回の夏季校内研修会では、校内研究主任が単独で研修を執り行うのではなく、総合的な学習の時間を担当している教員が話題提供をしたり、積極的に質問や意見を述べる教員がいたり、教員全員で研修会を進めている様子が随所に見受けられました。上記のような取組の工夫が、校内研究に対する教員の意欲を高い水準に保ち、教科会の取組へとつながっていることを実感しました。

注目! 教員の学びを支える校内研究主任の取組

S中学校のような、安心・安全な風土を基盤とした活気あふれる校内研究は一朝一夕で築かれるものではありません。そこには、S中学校におけるこれまでの実践を支えてきた校内研究主任の先生方の取組によるものが大きいと想像します。今年度から校内研究主任を担当されているT教諭の取組や心掛けについて整理しました。



T教諭が心掛けておられる取組は、本研究における質問紙調査の分析から考察した事柄(研究主題や取組への理解、自信を深める他者からの価値付けの重要性)に通じるところがありました。そういった面でも、日々、試行錯誤を重ねながら、教員との関わりを大切にしておられるT教諭の校内研究主任としての姿は、本研究におけるロールモデルになるのではないかと感じました。

研究委員の皆様の振り返り



S中学校の夏季校内研修会の参観を終えて

- ・ S中学校の先生方がこの研修の目標を理解し、進んで話し合っている姿や発表しようという温かい雰囲気を見ることができました。
- ・ 先生方が自分の強みを生かして校内研究に参加する姿が衝撃でした。教員一人一人が自分の強みや弱みを把握し、それぞれが目標をもったうえで、同じグループの先生方と共通テーマにアプローチしていくというイメージが具体的にになりました。
- ・ 研修時間の大半が、先生方が協議の時間として設定されているのも、教員一人一人が主体となる研修会を実現していると感じました。
- ・ 1学期の成果を振り返る時間の際、写真や動画を使い、「生徒の姿」を基にして教員が語るという場面も印象的でした。生徒の姿が実際に見えてくると、そこからできる話もより深く、具体的になるのだろうと考えました。そこから、「生徒が〇〇をできるように、私たちはどのような働きかけができるだろう」というように、終始「生徒」が中心に据えられた検討の場面であったと思いました。
- ・ S中学校の先生方は、まさに「新たな教師の学びの姿」を体現されており、研修の参観を通して、2学期からも校内研究に前向きに取り組んでいきたいと感じました。また、校内研究主任としてのあり方を再度考える機会となりました。
- ・ 他校の実践を自校の取組を比較しながら実際に見ることで、これからできること、現在足りていないことを具体的にイメージすることができました。校内研究の進め方、体制等参考になることが多かったです。特に、共通理解がきちんとできていることや、職員全体が目的を理解して参加しているところが校内研究の充実につながっていることを実感しました。

自校の校内研究に生かしていきたいこと

- ・ 自校では、総合的な学習の時間と生活科を窓口の研究を進めています。これらの教科について考えるだけでなく、他教科とのつながりも考え、全ての学習を通して子どもたちに学ぶ力をつけていけるように、つながりを可視化したものの作成、教員の共通理解の促進、そして意欲の向上に努めていきたいです。
- ・ ① 1学期に行った振り返りを基に、2学期に意識したいことについて教員一人一人が目標をもつ。
② 校内研究について意識したことに関わる子どもの姿の記録を溜めていく。
③ プチ校内研究、OJTを活用して自分の取組を子どもの姿から語り合う。
④ 校内研究主任だけでなく、他の教員も巻き込んだ研究会の運営。
以上4点を生かしていきたいと思います。
- ・ 年度当初から綿密な計画・計画の見直しというPDCAサイクルがなされていると感じたので、2学期に向けて計画の見直しを進めていきたいです。また、様々な分掌の先生方にも協力していただきながら、チームとして校内研究を進めておられたので、学校全体として研究に取り組めるようにアナウンス、ファシリテートをしていきたいです。
- ・ 校内研究主任だけが会を進めるのではなく、周りの教員をもっと巻き込んで進める校内研究にしていくための工夫をしたい。責任が個人に向かないように学年部で取り組めるように計画して、気軽に参加できるようにすれば、もっと雰囲気もよくなるのではないかと思うので、二学期以降に生かせる方法を考えたいです。

S中学校の校内研究主任との懇談より

- ・ T教諭との懇談の中で、「あくまでシンプルに、たくさんのことをつめこまない」とおっしゃっていたことが学びになりました。校内研究の軸がいつのまにかぶれないように、伝えていくことを吟味しながら推進していくことの大切さについて学びました。



今回、校内研究活性化プロジェクト研究として初の県外での研究会を実施させていただきました。S中学校の皆様が校内研究に向かわれる熱の高さ、楽しそうに学びに向かわれている様子を参観させていただきながらとてもワクワクしていました。この通信を書きながら、撮影させていただいたビデオを何度も見返していたのですが、どのシーンを見ても笑顔が絶えない研修(究)会でした。T教諭との懇談で、質問にもありましたが、これだけの学びのコミュニティを醸成するには、何をすればよいのだろうかと考えさせられました。もちろん一朝一夕でできるものではなく、時間をかけ、様々な要素が絡み合って今のS中学校が成り立っていることは理解しています。そんな様々な要素の中で、もし私が校内研究主任(研究委員)としてこのプロ研に参加したのならば、自校で実施してみようと思えたこと第1位は「褒め合える(認め合える)環境づくり」です。多様な意見が出てくる中、S中学校の学びのコミュニティでは否定からではなく受容から協議が始まりました。やはり、自分の考えを受け入れてもらえることは新たなことに挑戦するモチベーションにつながるのだろうと、ビデオを観ながら考えた8月末日でした。



研究員
しまうち ゆうしょう
島内 佑祥



研究員
たけうち たつや
竹内 達哉

校内研究活性化プロジェクト研究 第6回研究会のお知らせ

会場校：X小学校

日時：令和6年10月4日(金)12:40~16:40

第6回は、X小学校を会場として研究会を開催します。当日は、研究委員のA教諭が公開される授業の参観と授業実践後の協議会を参観させていただきます。授業の参観後にプロジェクト研究メンバーで協議会における参観の視点を確認します。協議会では協議グループの中に入ってください、ともに協議もしていただきながらX小学校の校内研究の取組をじっくりと参観していただきます。よろしくをお願いします。